

【黒石市立中郷中学校区】

学校名	校長・氏名	担当者職・氏名
黒石市立黒石小学校	校長 阿部 誠	教諭 岩渕 靖宝
黒石市立中郷中学校	校長 松山 正孝	教諭 尾上 真朗

I 校区の概要

黒石市の中心市街地と西部の住宅地、北部の田園地に位置する。市街地の中心部には弘南鉄道黒石駅、弘南バス黒石営業所、黒石病院、黒石警察署、スポカルイン黒石など多くの公共施設が建っている。また、各校歌の歌詞に「東に高き八甲田、西にそびえる岩木山」、「岩木の山裾、津軽の大野」とあるとおり、豊かな自然に恵まれ、かつ黒石城址が残るなど古い歴史を色濃くとどめている。

大きく3つに分かれる本校区は、西部地区連絡協議会、中部地区振興協議会、北地区振興対策協議会をはじめとして学校教育活動に協力的で、地区住民や社会団体と連携し、早朝登校指導など住みよい地域にするための住民活動が盛んな町会が多い。

黒石小学校は、令和2年に黒石・中郷・北陽の3校が統合して、17クラス（特別支援学級を加えると21クラス）、児童数500名の大規模校となった。それぞれの校風で育ててきた個性と学習習慣を生かしながら、子どもたちは新たな黒石小学校の文化をつくろうと、笑顔で充実した毎日を送っている。

中郷中学校は、通常学級8クラス、特別支援学級2クラスの計10クラス、全校生徒数258名の中規模校である。明るく素直な生徒が多く、行事や部活動に熱心に取り組んでいる。令和3年度には、統合した黒石小学校の1回目の卒業生が入学し、1中学校区1小学校体制が本格的に始動した。

小中学校が隣接した敷地内にあることから、教職員の交流はもとより、児童・生徒の交流も容易な環境にあり、今後の小中連携について、各分掌・各担当ごとに計画を練っているところである。

黒石小学校の児童は、CRTの結果から考察すると、どの学年においても全国比に近い得点率だったことから、学習内容が定着している児童が多いことが分かる。しかし、自分の思いや考えを相手に分かるように伝えたり表現したりすることが苦手な児童が多いことから、校内研修では「学び合いを通して表現する力を養う学習の工夫」を進めている。体力面では、体を動かすことが好きな児童が多く、休み時間に校庭や体育館で仲良く遊んでいる。反面、運動嫌いな児童もおり、二極化の傾向が見られる。

中郷中学校の生徒は、学習規律が整い、落ち着いて授業に臨んでおり、意欲的に授業に向かう姿勢が見られる。反面、個別の配慮や支援が必要な生徒もおり、家庭学習の取組が不十分で学習内容の定着が思わしくない生徒もいる。また、より良い人間関係をうまく構築できない生徒も少なからずいる。行事や生徒会活動への取組は良好で、部活動への取組も、運動部、文化部ともに意欲的で熱心である。

校区では、以下の2つの項目を重点化し、教育活動に取り組んでいる。

1 確かな学力の育成

- (1) 授業の充実(教材研究やICT機器の活用、「くろいし型授業スタイル」の実践、見せ合い授業等)を図る。
- (2) よりよい学習習慣(学習規律の確立、家庭学習の習慣化等)の育成を図る。
- (3) 各種テスト(レディネステスト、定期テスト、単元テスト、学習状況調査等)、検定の活用を図る。

2 思いやりの心の育成と人間関係づくり

- (1) 安心感を抱ける集団づくりに努める。
- (2) 児童(生徒)の意見で活動する児童(生徒)会活動の充実に努める。
- (3) 問題行動の未然防止と早期解決に向けた、協働的な生徒指導体制の構築に努める。
- (4) 不登校やいじめ等の未然防止に向けた、児童生徒一人一人のきめ細やかな生徒理解に努める。
- (5) 家庭や地域、関係機関との連携に努める。

Ⅱ 研究の概要

本校区は、令和2・3年度の2年間、青森県教育委員会からの指定を受け、「居場所づくり・絆づくり調査研究」に取り組んできた。

1 本事業の目的

児童生徒の意識調査を踏まえた年3回のPDCAサイクルを実施して、児童生徒にとって安心して学べる環境づくりを推進することが、不登校やいじめなどの未然防止に有効であることを調査研究によって明らかにする。

2 調査研究の指標としての不登校児童生徒数の減少

不登校児童生徒数を減少させるためには、個別支援を行うことも重要であるが、本調査研究の目的ではない。本事業は「安心して学べる環境づくり」を推進することを目的としており、その結果として不登校児童生徒の新規数を減少させることを効果指標としている。また、小中連携を生かした相互環境づくりや円滑な接続を図る取組が不登校の未然防止として重要である。

3 「居場所づくり」と「絆づくり」の取組

不登校やいじめ等の未然防止の取組を推進するために、本中学校区では、「居場所づくり」とは、児童生徒が安心して、自己存在感や充実感を感じられる場所や場面をつくりだすこと、「絆づくり」とは、主体的に取り組む共同的な活動を通して、児童生徒自らが絆を感じ取り、紡いでいくことと考えた。「絆づくり」を進めるのは児童生徒自身であり、教職員に求められるのはそのための「居場所づくり」、いわば黒子の役割と言える。すなわち、教職員が進めた「居場所づくり」を、児童生徒は享受する存在と言える。

このことを、校区の教職員で共通理解を図り、児童生徒が安心して生活することができる「居場所づくり」に全教職員で取り組んでいる。

4 研究の進め方

(1) 児童生徒の意識調査 → 児童生徒の声を聞き、受け止める！

児童生徒は、「ア 学校が楽しい」、「イ みんなで何かをするのは楽しい」、「ウ 授業に主体的に取り組んでいる」、「エ 授業がよくわかる」の4つの質問に4件法で答える。これを各学期の始まりに行う。

※小学校は、上学年（第4～6学年）が取り組む。

(2) 年3回のPDCAサイクルの実施 → 全教職員の積極的参画が必要！

児童生徒の意識調査の結果から、各学年の強みや課題を考察・分析し、それに基づいた具体的目標として、各学年で年間目標（重点取組項目とその目標値）を設定する。それを達成するための手立てを学期ごとに立て、次回の意識調査までの間、全職員で実践する。数値の増減に囚われず、数値の裏にある児童生徒の声を読み取り、しっかりと考察し新たなプランを立てて実践することを繰り返す。そのプラン立案には全教職員が関わり、児童生徒の「居場所づくり」に参画する。



Ⅲ 1年目の研究

研究1年目は、各校の担当者が、2回行われた連絡会議の中で、講演を拝聴したり情報提供を受けることにより、本事業を推進していくために必要な知識や取り組み方の留意点などを学び、それを自校の教職員に伝達した。先進校視察も予定していたが、新型コロナウイルスの影響により中止になったことは残念であった。

以下に、1年目の各校の取り組みについてまとめた。

1 黒石小学校

研究1年目は、黒石小学校が新設された年であり、すべての学年で児童の4月の意識調査は「ア 学校が楽しい」が60%を超えていた。また、「イ みんなで何かをするのは楽しい」は70%以上と、新し

い学校や環境に期待をもっている児童が多いことが分かった。教職員は、その結果とは裏腹に、統合前の3校において、それぞれ独自の教育活動が行われてきたことや、学校規模の拡大等、環境の変化に適應できない児童が出ないように注意深く見守る必要があると感じていた。そのため、この意識調査は、児童の思いを計る機会になると考えP D C Aサイクルに意欲的に取り組んだ。

4月の数値を分析すると、どの学年も「ウ 授業に主体的に取り組んでいる」が50%程度で、他の項目に比べると10ポイント程度低かったため、それを高めることを目標として手立てを考え取り組んだ。手立てとして、新しい環境や人間関係づくりが円滑に行われるよう、授業の中で意図的にグループ活動を行ったり、学び合いの機会を設けたりと児童同士の交流を促す学年が多かった。

7月の意識調査では、教職員の予想と合致し、新しい環境への期待が現実となったことで、すべての学年においてすべての項目が下がったと考える。しかし、この7月の数値が、本当の子どもたちの声であると捉え直し、各学年で手立てを練り直した。手立てとして「学習において児童の意識を惹き付ける導入の工夫」、「授業中における自己肯定感を高めるような声かけの工夫」、「主体的な学びや活動の実践」があげられ、それぞれの学年の実態に合わせて取り組んだ。しかし、数値の増減幅は小さくなったものの、少し低くなっていった。その結果を受け止め、各学年でいろいろな手立てを講じてきたことにより、3月の意識調査では、6年生以外、すべての項目で高まった。6年生は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止対策による行事や式典の中止で、最高学年としての活躍の場が例年より減少したことが、意識調査に反映されたと考え、次年度は、行事や式典を中止ではなくできるだけ実施する方針とした。

また、調査研究の効果指標(不登校児童生徒の新規数減少)との関連については、右表のような結果となった。

新規の児童は、新しい環境への不適應が一つの原因だと考えた。継続の児童は、家庭環境によるもので改善が難しいが、前年度より登校日が増え、環境の変化が功を奏した。



【主体的な学びの例】
総合的な学習の時間
「医療機関へ感謝を届けよう」
プレゼントする消毒液の
ラベルづくり

令和2年度		
不登校	新規	1
	継続	2

(人)

2 中郷中学校

4月に行った生徒の意識調査の結果、どの学年も「ア 学校が楽しい」「イ みんなで何かをやるのは楽しい」の値が60%以上で、80%を超える高い数値の学年もあった。それに対して、「ウ 授業に主体的に取り組んでいる」「エ 授業がよくわかる」の値が50%前後であった。このことから、学校生活に楽しみを見出している生徒が多いこと、学習面での支援が必要な生徒が多いことが分かった。この結果を受けて、学年ごとに令和2年度の重点取組項目と目標値を、1年生は「ウ 授業に主体的に取り組んでいる(目標値50%)」、2年生は「エ 授業がよくわかる(目標値45%)」、3年生は「イ みんなで何かをするのは楽しい(目標値72%)」に設定した。また、目標達成のための手立て(プラン)を考え、学年職員で実践することとした。その後、学期末ごとに生徒の意識調査を行い、結果の考察、新たな手立ての話合いと実践というP D C Aサイクルを繰り返した。全体的な傾向として、12月の意識調査で一度数値が低くなったものの、3月の意識調査では、重点取組項目の数値がすべての学年で再度高くなった。年間を通して数値が一番高かった項目のある学年もあった。令和2年度に取り組んだ主な手立て(プラン)は、次のとおりである。

○学習に対する意欲面を育て、

やればできるという自信と実感をもたせるための手立て

→ ユニバーサルデザインの視点による授業づくり。

→ 家庭学習と連動した5分間の確認テストを週1回実施。

○学校生活で「楽しい」と感じる場面を多くするための手立て

→ 学年委員の運営による学年レクや催し物を実施し、学級の団結の場を多く設定した。



【学年レク】
～特大トランプを使った神経衰弱～

- 学年委員を中心として、廊下の掲示物や装飾品を協力して制作する場を設定した。
- テストの予想問題に取り組みせる場面や、受験に向けた面接練習などの場面において、学年委員を活用することで生徒が主役となるようにし、楽しく学んだり練習したりする雰囲気づくりを行った。

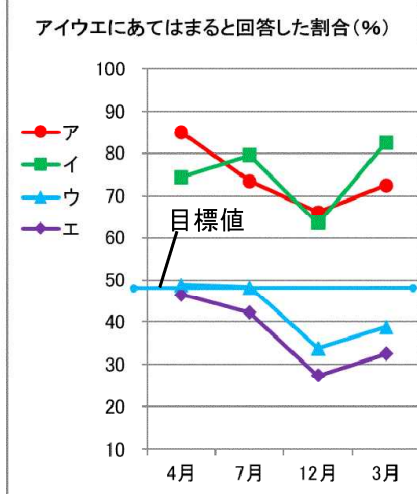
○登校しぶりや不登校傾向の見られる生徒に対しての手立て

- 黒石市学習適応指導教室との連携。
- 登校しぶりの見られる生徒に対して、別室の確保や、別室登校に対応するために、主に学年体制で教員の配置を行った。

最後に、令和2年度の各学年の値の推移は、次の表やグラフのとおりであった。

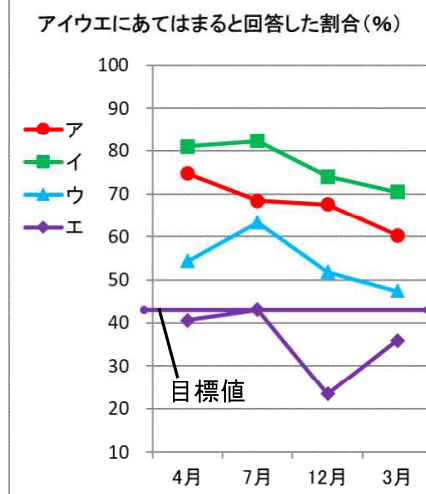
【1年生】

		令和2年度 1学年			
		4月	7月	12月	3月
重点	ア	84.9	73.5	66.2	72.5
	ウ	74.4	79.5	63.6	82.5
目標値	ウ	48.8	48.2	33.8	38.8
50	エ	46.5	42.2	27.3	32.5



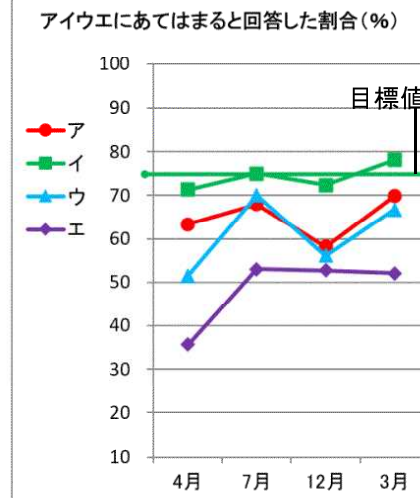
【2年生】

		令和2年度 2学年			
		4月	7月	12月	3月
重点	ア	74.7	68.4	67.5	60.3
	イ	81.0	82.3	74.0	70.5
目標値	ウ	54.4	63.3	51.9	47.4
45	エ	40.5	43.0	23.4	35.9



【3年生】

		令和2年度 3学年			
		4月	7月	12月	3月
重点	ア	63.4	68.0	58.2	69.8
	イ	71.3	75.0	72.4	78.1
目標値	ウ	51.5	70.0	56.1	66.7
75	エ	35.6	53.0	52.7	52.1



IV 2年目の研究

1年目の研究の中で、特に、小学校では意識調査が全学年で行われているわけではなく、全教職員の参画意識が低いという反省があったため、小中合同でこの事業に関する研修会を行った。しかし、研修会を計画した時期に新型コロナウイルス感染症の感染が拡大したため、各校でそれぞれ研修を行うことに換えた。講師として、黒石市教育委員会から、大高指導主事をお招きし、小中それぞれの会場で同じ内容の講義をしていただいたことで、学区の全教職員がこの事業の趣旨や目的、狙いなどを共通理解できた。

また、中南教育事務所主管で行われた「小・中学校生徒指導研究協議会兼安心できる学校づくり研修会」にて、本事業への取り組みについての発表を行った。時期が6月であったことから、1年目の研究内容の発表が主で、途中経過の発表となったが、自校での取組を振り返るいい機会となった。

以下に、2年目の各校の取組についてまとめた。

1 黒石小学校

4月の意識調査を分析すると、どの学年も「ア 学校が楽しい」が60%近くの高い値だった。4・5年生は、「イ みんなで何かをするのは楽しい」が72%以上だったため、前年度に引き続き学校生活を楽しむことができる下地ができていることが分かった。しかし、6年生は、前年度の3月の意識調査では「ア 学校が楽しい」が、84%と高い値だったが、61.5%に低くなった。同様に、「イ みんなで何かをするのは楽しい」「ウ 授業に主体的に取り組んでいる」も20ポイント程度低くなった。これは、すべての学年でクラス替えを行ったため、1年間過ごしてやっと環境に慣れたのが、また友達づくりから始めなければならないという不安があったためだと思われる。しかし、「エ 授業がよくわかる」の項目

が15ポイント程度上昇していることから、学習に集中して取り組む環境づくりができていていると考えた。この結果をもとに4年生は、子どもたちの興味・関心を引き出すための教材研究をすることを、5年生は、少人数指導を行うほか、子どもたちの発表や活躍の場を意図的に設け、有用感をもたせることを柱に「エ 授業がよくわかる」が高まると考え取り組んだ。6年生は、授業や行事にめあてをもって取り組ませたり、意図的なグループ活動の場を設け円滑な人間関係をつくりながら「ウ 授業に主体的に取り組んでいる」の項目を高めるための手立てを考え、取り組んだ。

4年生は、「エ 授業がよく分かる」の項目において、4月60.5%だったのに対し、手立てを講じたにも関わらず、7月41.3%、12月34.7%と低くなっていった。学習したことが身に付きにくく、繰り返し練習を重ねることで基礎基本を定着させてきたが、文章を読む問題や活用問題に苦手意識をもっている子どもが多いのではないかと考えた。

子どもたちの苦手意識を克服する手立てとして、個別指導の時間の確保や子どもたちの頑張りをほめたり認めたりする場面の設定により、自己肯定感を高めさせ、その結果、児童が授業に進んで取り組み、学習意欲を高めることにつながり、授業が分かるようになると考え、更に取組を進めている。

5年生は、4月53.2%だった「エ 授業がよく分かる」が7月45.1%と8ポイントほど低くなったが、12月は51.8%と4月と同値程度になった。この数値の変化を、クラス編成等の環境変化に適応するために時間を要したのではないかと分析した。宿泊体験学習など1つ1つの行事や学習活動を終えるごとに学級・学年の絆が育まれたことで、安心して学習できる環境がつけられたと考えられる。それにより、学年に関わる先生方の手立てと時間が減少し、授業に集中できる環境が整ったと考えられる。

6年生は、4月56.4%だった「ウ 授業に主体的に取り組んでいる」が、7月55.1%となり、あまり変化しなかったが、12月は65.4%と10ポイント程度高くなった。これは、学校行事や児童会活動を実施できたため、6年生が活躍する場をつくることのできたことや、その準備の時間のために学習時間を限定したことで一人一人の意識が高まったと考えられる。卒業まで学校のために何かできることは無いかを常に意識させ意欲が継続するように努めていくこととした。

また、調査研究の効果指標(不登校児童生徒の新規数減少)との関連については、下の表のような結果となった。新規の児童は、SNSに係る問題が原因だと考えている。このことから児童の発達段階に応じた学習内容で情報モラル指導を定期的に行うこととした。また、もう1名と継続の児童は、家庭環境により欠席日数が多くなっている。

令和3年度		
不登校	新規	2
	継続	1

(人)



【児童の意見を生かした主体的活動例】
全校遠足で予定していた
ウォークラリーの様子
(企画運営を6年生が担当)

2 中郷中学校

研究2年目は、2、3年生は前年度の意識調査のデータを踏まえた上で取り組み、1年生は小学校6年生時の意識調査のデータを引き継いだ上で取り組んだ。

4月に行った生徒の意識調査の結果、1年生は、小学校6年生時の最後の値をすべての項目で大きく上回り、中学校生活に大きな期待を抱いて入学してきたことがうかがえた。2、3年生は、前年度の値を上回る項目はあったものの、下回る項目もあった。この結果を受けて、令和3年度も、各学年で重点取組項目と目標値を設定することから始め、1年生は「イ みんなで何かをするのは楽しい(目標値75%)」、2年生は前年度から引き続いて「ウ 授業に主体的に取り組んでいる(目標値50%)」、3年生は前年度から変更して「イ みんなで何かをするのは楽しい(目標値75%)」に設定した。

以下に、小学校からのデータを引き継いで取り組んだ1年生の詳細と、2年続けて重点取組項目とした2年生の取組の詳細をまとめた。

1年生では、小学校から引き継いだ6年生の時のデータで、「ア 学校が楽しい」が61.9%から40.6%に、「イ みんなで何かをするのは楽しい」が74.2%から55.2%に、ともに1年間で20ポイント程度低くなったことに注目した。これは、小学校最高学年としての1年間、新型コロナウイルス

ルス感染症拡大の影響を受け、行事や式典などの中止により、思うように活動できなかったことが反映されたものと考えられた。また、学校生活の基盤となる集団生活に楽しみを見出せず、集団生活に期待感をもてない生徒が多いことが予想されたため、今年1年間、学校が集団で生活する場であることを意識させ、みんなと協力して活動することの楽しさや素晴らしさを実感させることに重点を置くこととした。そのために、学年委員に活躍の場を与えながら、学年みんなで取り組めるような以下のような手立て(プラン)を考え、実践した。

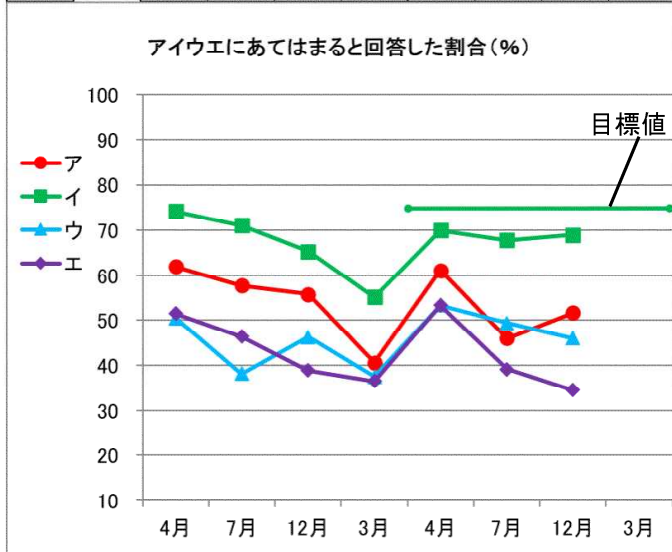
- ・学年レクを企画し、学級の団結を図る場を多く設定する。
- ・廊下の掲示物や装飾品を、協力して作成する場を設ける。
- ・学年みんなですすみの予想問題に取り組む企画をし、楽しみながら学習できるようにする。
- ・短学活で、みんなのできるレクを取り入れる。

その結果、入学当初は話を聞くことを苦手としている生徒が多いように見受けられた学年だったが、徐々に落ち着いて規律ある集団生活を送れるようになってきた。重点取組項目とした「イ みんなで何かをするのは楽しい」の値も、小学校6年生時の最後の値55.2%を上回り、毎回70%前後の高い値を示し、目標値とした75%に届きそうな状況となった。このことから、生徒の実態と教師側の見立てが一致してきており、有効な手立てを講じることができていたと考える。

小学校6年生の時のデータを引き継ぐことができたことで、学年の課題をしっかりと把握した上で取り組むことができたことは、大変有効であった。校区として、小学校と中学校が同じ取組をすることの利点の一つがここにあると感じている。

1年生の令和2～3年度の2年間の値の推移は、次の表やグラフのとおりであった。

重点	ア	令和2年度 小学6年				令和3年度 1学年			
		4月	7月	12月	3月	4月	7月	12月	3月
イ	イ	74.2	71.1	65.3	55.2	70.0	67.8	69.0	
目標値	ウ	50.5	38.1	46.3	37.5	53.3	49.4	46.0	
75	エ	51.5	46.4	38.9	36.5	53.3	39.1	34.5	



【クリスマスの装飾品】



【テストの予想問題に挑戦】

2年生では、4月の生徒の意識調査の結果から、昨年度同様、学校生活に楽しみを見出している生徒が多い反面、学習面での支援が必要な生徒が多い傾向から、今年度も継続して学習意欲を育てる取組に力を入れていく必要があると考えた。また、昨年度は目標値の50%に届かなかったことから、今年度も同じ項目を重点として、2年計画で継続した取組を行うこととした。令和3年度に取り組んだ主な手立て(プラン)は、次のとおりである。

○学習に対する意欲面を育てていくための取組

- 家庭学習と連動した5分間の確認テストを週1回実施。
- 家庭学習ノートの活用が素晴らしい生徒のノートを掲示。



【グループ活動の様子】

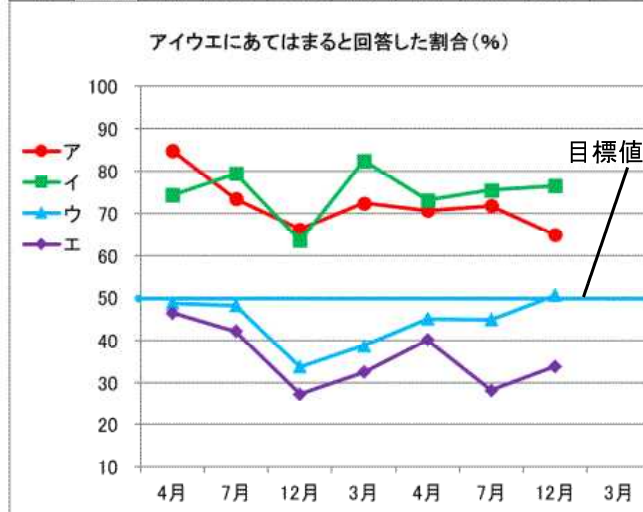
○ユニバーサルデザインの視点による授業づくり

- 導入での興味・関心を高める工夫(課題設定、動機づけ)。
- 「できた!」という達成感を味わわせるための活動。
- グループ活動による伝え合う活動。
- 生徒の頑張りを認める肯定的な表現による言葉かけ。

2年生の令和2～3年度の2年間の値の推移は、右の表やグラフのとおりで、昨年度の12月以降、上昇傾向にあることがわかる。特に、重点取組項目としていた「ウ 授業に主体的に取り組んでいる」は、緩やかではあるが上昇を続け、今年度の12月には目標値の50%に達した。これは、昨年度から取り組んできた手立てが、ようやく生徒の実態に即したものになってきたと捉えている。つまり、生徒の実態と教師側の見立てが一致し、有効な手立てを講じることができたと言える。

2年生は、2年間同じ項目を重点として、目標達成のために、様々な手立てを講じてきた。1年間では数値の変容を見てとることができなかったが、粘り強く取組を続けてきたことで、ようやく数値として表れたことから、我々教師側が、同一歩調で粘り強く取り組み続けることの大切さを感じた。

重点	ア	令和2年度 1学年				令和3年度 2学年			
		4月	7月	12月	3月	4月	7月	12月	3月
ウ	イ	84.9	73.5	66.2	72.5	70.7	71.8	64.9	
目標値	ウ	48.8	48.2	33.8	38.8	45.1	44.9	50.6	
50	エ	46.5	42.2	27.3	32.5	40.2	28.2	33.8	



V 成果と課題

1 黒石小学校

(1) 成果

子どもたちの意識を数値化することで、数値の裏にある子どもたちの声を聞いたり、教師の手立ての成果を確認する機会となった。特に、全教職員が手立てを話し合うことで子どもたちにとって安全で安心して生活することができる「居場所づくり」を行うことができた。

また、2年間の実践を通して、一人一人が協力し、活躍できる行事や児童会活動による「居場所づくり」が子どもたちに大きな影響を与えることが分かった。これからも教職員で話し合っ子どもたちのために最良の機会となるように実施していきたい。

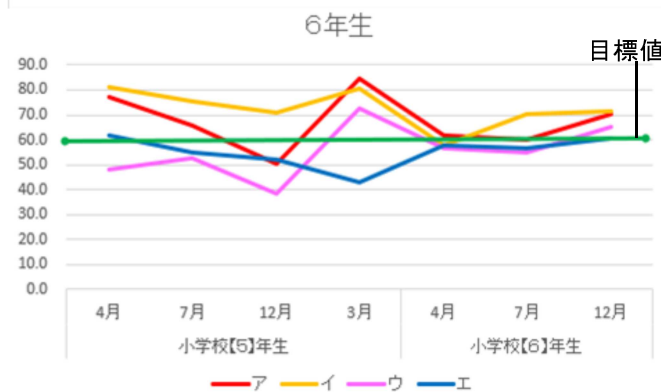
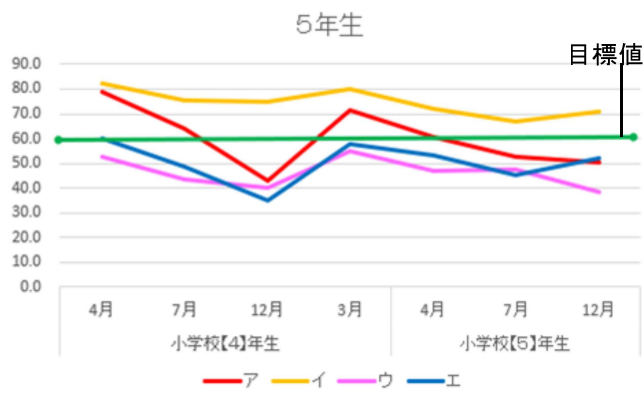
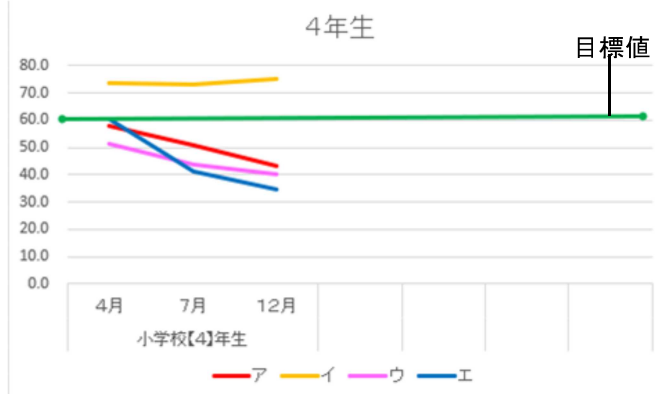
日々の授業で学習内容が分かるだけでなく、分かったことが実感できるような工夫をし、自己有用感を高めていくことが大切だと分かった。数値を真摯に受け止め教師が常に教材研究を繰り返していくことが必要だと感じ、年3回振り返りのための良い機会となった。

この調査研究を次の学年や中学校へと引き継いでいくことで、その学年の数値と手立てが蓄積される。新しく手立てを考えるとときや今の取組の効果を確認したり、見直したりする際の指標となるのでこれから

も続けていきたい。

(2) 課題

小学校では、毎年クラス編成を行ったため、意識調査の結果は、4月が新しい環境への期待値込みで高い数値が出て、7月に下がるという結果となった。これは、子どもたちにとって落ち着いた環境からのスタートではなく特殊な環境で始まったといえる。これからも続けて、落ち着いた環境で始まった場合の数値の変容を見ていきたい。



2 中郷中学校

(1) 成果

「生徒の声を聞く」ことから始まるPDCAサイクルを実践することで、「生徒が安心して学べる環境づくり」を推進できることを実感した。特に大事なものは、教職員が同じ手立てを講じ、それが生徒にとっての安心感につながっていくのだと感じた。安心して学べる環境づくりのために「何をしていくか」ということを、教職員全員の参画により取り組めたことが一番の成果であった。

また、我々教職員が同一歩調で粘り強く取り組み続けることで、徐々に変容が見られるようになることもわかり、あきらめずに粘り強く取り組むことが大切であることを再確認できた。

今回の調査研究は、校区として、小学校と中学校が同じ取組をすることもポイントの一つだったが、その利点の一つとして、中学校1年生の年度初めに指導の方向性を話し合う際に、小学校6年生時のデータが引き継がれることで、学年の課題を把握した上で取組を始めることができることが挙げられる。

(2) 課題

「居場所づくり」を進めるのは教師の役割であるという共通理解のもと、どの学年も学年委員に活躍の場を与えながら、様々な活動場面を設定してきた。しかし、この2年間は、新型コロナウイルス感染症の影響により、多くの行事が中止や延期となり、行事の中で設定するはずだった「場」が減り、その中で生徒の「絆づくり」ができなかった。本来、行事を通して身に付いているはずのものが、コロナ禍前の生徒に比べると、身に付いていないことが推察される。そのような生徒に対して、我々教師側がどのような手立てを講じていくかが大切であり、より「生徒の声」に耳を傾けていくことが重要となってくる。

最後に、調査研究の効果指標(不登校児童生徒の新規数減少)との関連についてだが、令和元年度の新規不登校生徒数が1人であったのに対し、令和2年度は4人、令和3年度は12月末現在で5人で、新規不登校生徒数は、本調査研究前と比べて増加という結果になった。「居場所づくり・絆づくり」の取組を継続しながら、今後も経過を見ていきたい。